豊かな人間性を育てる学校経営
～「荒れた」学校再建の実践～

小　幡　啓　靖

1．はじめに

本稿は、現代の学校病理に対する示唆を得るために長野県M中学校の教育実践を紹介することを目的としたものである。併せて本稿が目指すのは、学校を総体として理解するための手がかりを得ることである。学校を捉えようとする従来の営みが、その組織特性や教師の力量形成、教育実践の質などに細分化する傾向が見られたのに対し(1)、本稿の記述では、学校そのものはそれらが個々別々に機能しているわけではないという素朴な認識に立ち返り、参与観察を中心に据えることによって各要素を結びつけ直すことを試みた。

調査対象の長野県M中学校は、長野県南部の農村地域M町（人口24,000人）にある、学級数27、生徒数936名教員数50名の町立の中学校である。M中学校では1980年代後半から1993年頃まで対教師暴力や器物破損などの生徒による事件が相次ぎ、いわゆる「荒れた学校」の様相を呈していたが、ここ数年は鎮静化して、地域における学校の評価も高まっている。校内暴力等の発生件数が全国的に見て必ずしも減少しているとは、言えない現状に目を遣ると(2)、M中学校での教育実践には着目すべき要素がふくまれているように思われる。

そこで、筆者は「豊かな人間性を育てる学校経営」の実態を捉えるために、M中学校の主要な学校行事（文化祭・西駒ヶ岳登山）への参加、教員研究会への参加、及び授業や清掃を含む生徒の一日への参与観察を行った。また、そこで受けた筆者の印象や疑問をもとに、教師や生徒に対して様々な場面でのインタビュー調査を並行して行った。さらに、それでは筆者の主観的判断が余りにも大きくなることを警戒し、教師・生徒に対する質問票を用いたアンケート調査を実施した。（実施期間は1995年12月22日～1995年２月、現在までの有効回答数、教員35、生徒720 サンプルデザインは表１参照）。また教育委員会も数度訪問した。

筆者は、当初から、M中学校の教育実践の中でも、特に「合唱」「清掃」「西駒ヶ岳登山」などに着目していた。それは、学校長の指摘通り、これらの活動こそ生徒に「学校」や「自己」に対する誇りを持たせることにつながると考えられるからである。

2．「荒れたM中学校」の実際と再建へ

(1)「荒れた」M中学校の実態

M中学校における諸問題の発生とその後の鎮静化について「荒れた」当時をよく知るA教諭は「いわゆる問題生徒が後輩に自分の行ってきたことを引き継がせるかどうかがひとつのポイントである」と指摘する。確かに地元の市民新聞に掲載された当時の記事には、M中学校に在籍する生徒の関わった事件とともに、M中学校の卒業生と思われる高校生などのグループの起こした事件、あるいは両者が集団を形成して起こした事件が多い。このことは、兄弟姉妹や先輩後輩等の関係を通じて、問題行動が継承されていたことをうかがわせる。

1990年代のM中学校の実情は、それ以前に比べるとやや鎮静化したと言われているが、それでも91年の２月にはM中学校の窓ガラス40枚が割られる事件が発生している。そして翌92年の５月には同様に中学校とそれに隣接した社会体育館のガラス約30枚（約54万円相当）が投石などによって割られている。後者については、その後、中学２年生男子と中学３年生女子及び男子高校生によるものと判明している。記事によると、彼らは隣接する市や町でバイクを盗み深夜に乗り回すこともしており、学校への不満からガラスを割ろうと相談して行動に及んだとされている。

このことは、同年３月に同じ社会体育館に高校生６人が侵入し、飲酒・喫煙の他に床を燃やした事件とも無関係ではないと考えられる。先のA教諭は、当時、学校に隣接した施設での喫煙は後を絶たず、校外での生徒指導に力を注ぐ必要があったという。また、保育

園の電話機の窃盗事件（93年１月）に、暴走行為を繰り返していた16歳から18歳の少年４名が関わっていたことも同様の事件と見なすことが出来る。

特に、93年６月にはM中学校で、生徒による対教師暴力事件が発生している。記事によれば、３年生の男子生徒３名が35歳の男性教諭の頭や腹部に殴るけるなどの暴行を加え全治10日のけがを負わせるとともに、阻止しようとした教諭３名にも軽いけがを負わせたとされている。この生徒は午前中の授業に出席せず校舎外で爆竹を鳴らしていたことについて別の教師に注意され、それに腹を立てて、男子生徒３名のうちの１名を担任していた男性教師に暴行を加えたとされており、学校側は所轄の警察に届け出ている。

この時期には、教師が女生徒に体罰を加え全治４日間のけがを負わせるという事件や、近接小学校の史料施設をライターで失火させるなどの事件も相次いで起こっている。学校長が保護者にこれらの事件の説明や謝罪をしたことも報じられている。

(2) 再建への働きかけ

こうした状態を改善するために目指されたのが、良い環境、良い雰囲気作りであった。具体的には、「美しい学校」にするために清掃時間には集中して清掃に取り組むことと学校や地域を四季折々の花で飾ることが目標とされ、また「響き愛」をスローガンに教師と生徒とがともに全校合唱に取り組んだ。現学校長は、これを「恕」の心で校風を育てると表現し、「一人一人の生徒が『自己の確立を図りつつお互いを尊重し合う』即ち『自己を愛すると共に、周りの人々を愛し、共に生きていこうとする心を育む』」と説明する(3)。

またこれと同時に、学校内で問題行動の多い生徒に対して積極的に声をかけることも試みられていた。教師個々人が自分は何ができるのかを考え、生徒をM中学校の子どもとして受け入れるよう努めたと言われている。A教諭は、授業時間以外にはできるだけ校内を歩き回り、生徒に声をかけたりスキンシップを図ったりしたという(4)。また器物破損等は出来るだけ早く処置を施し、校舎を傷つけられていない状態を常に保つことによって、事件の続発防止に努めたという。これによって器物破損等が起こった際にも、どの生徒によるものかの見当をつけることが可能となり、その上で「お前たちは知らないか」と問いかけることで、決して断定はしなくても生徒には全てが知られているという気持ちを喚起させるような注意をしていたという。なお、A教諭によれば完全に追いつめてしまうのではなく、一種の「逃げ道」（生徒が自分ではないと否定出来る余地や喫煙を見つけた際に煙草の火を消すだけの時間）を与えることが効果的であったと報告された。

こうした教員側の意図が実を結び、現在では生徒会活動においてもこうした意識が共有されている。生徒会は1995年度のスローガンを「伝統、そして創造　今M中に私たちの風を吹かせよう」と定め、重点目標として「一人一人が本気で取り組む清掃」「心をこめた奉仕作業」「全校がひとつになれる合唱」を掲げている。生徒総会の提案資料には、清掃面において「身支度がたいへんよくなって」きたこと、合唱で「共に感動し合える全校合唱を作り上げること」ができたことが紹介され、このスローガンについて「M中学校の良き伝統や校風といった財産を守っていこうという決意と、もうひとつは会員一人一人が個性と創造力を十分発揮してほしいという願いが込められています。私たちの新しい風とは…、新しい伝統を築き上げることでもあります」と説明されている。そして清掃については「身支度・無言清掃を徹底すること」、合唱については「力を合わせてひとつのものを作り上げる喜びをわかちあう」ことが目指されている。

自らの学校を、自らの手で自慢できる学校にしようという意図が表れているのである。

3．合唱の指導

(1) 合唱指導の概要

M中学校の音楽教諭は合唱について「M中ではクラス合唱をはじめ、学年合唱・全校合唱と生徒たちの元気な歌声が校舎に響きます。先生方が合唱をとても重要に大切に考えてくださり、みんなで一致して指導にあたられ出来上がるのです。そして生徒たちも合唱に熱心に取り組んでいます」と紹介している(5)。M中学校の一つの特色とも言える合唱は特別活動の「学芸的行事」に位置づけられ、秋の文化祭の中でのクラス対抗の合唱コンクール、生徒会行事として開催される全校音楽集会、新入生との対面式や３年生を送る会、入学式、卒業式、学年の音楽集会、及び後述する２年生の西駒ヶ岳登山等を軸に、当然なされる、それらの行事に向けてのクラス・学年単位での練習を含む様々な機会に行われている。

参与観察の対象とした２年生の場合、４月から７月の西駒ヶ岳登山までは登山の際に歌う「大地讃頌」の練習が行われており、ほぼ毎日下校時のホームルーム

の時間には各クラスから歌声が響いていた。秋の合唱コンクールで、この曲は学年合唱の曲目となる。また西駒ヶ岳登山の終了後は、同じ合唱コンクールでのクラスごとの発表曲の練習を開始する。そして10月下旬にコンクールが終了すると、その後は3年生を送る会での歓送の曲の練習に取り組んでいる。

これらの練習は、学年会などの特別活動の時間が当てられて学年協議会や音楽科との連携のもとに実施されるのみでなく、先の音楽教諭が指摘するように学級担任も一定の役割を果たす。6割の教師が合唱の指導に「力を入れている」と答えており、そう答えなかった教師も含めて「ホームルームの時間に練習を聞く」「学級通信の話題に取り上げる」「音楽教諭と連絡を取る」といった関わり方をしている（表2・3）。

この合唱に対する期待を、A教諭は、特に「荒れた」実態との関わりにおいて、合唱によって「生徒の心が級友から離れそうになった時にも、一つの歌を共に歌うことで自己の居場所・存在感を確認することができる」と指摘する。そしてその期待は今なお抱いていると言う。このことは、これまで合唱と学校・学級経営の関わりについて、学校現場から「重圧感で痛めつけられている生徒の心を軽くし」たり、「学習面では活躍できない存在の生徒までもクラス集団の中に溶け込みいきいきと行動」するきっかけになること、それが「地域や父兄の学校の評価を高める」こと、さらに「それを通して生徒が自分自身に誇りをもつためにたいへん効果があること」などが指摘されたことと重なっている(6)。

ただ、実際にM中学校の教師が全校での合唱に向ける意識は様々で、「やりとげた後の爽快感を味わってほしい」「上級生の合唱に触れて尊敬や向上心を抱くと思う」「合唱を通して学校を誇りに思う気持ちが育つと思う」といった項目については概ね共感しているとしても、学校・学級経営と積極的に関連づけることについては確信を持っていないようである（表4）。中には「合唱で生徒指導は時代遅れ」であり「もっとハイレベルな歌で表現力重視の指導」をするべきであると考える教師もいる。ただ、この教師も「共に合唱する仲間を大切にする」「他の場で活躍出来ない生徒が活躍出来る」という点には、ある程度の共感を示している。つまり合唱の指導に向かう教師にとって、学校・学校経営との関連は「確信は持たないがある程度はそれに期待する」というものらしい。このことは細かな差異は持ちつつも学校全体では結果として「合唱に向かう」ことについては一致していることを示している。

一方、生徒の側も、先の生徒会の方針に従って生徒会の学芸委員会の分掌事項として、こうした合唱の取り組みへの動機づけを図ろうとしている。そこでは「全校が一つになれる合唱にする」ことが目指され、「自ら積極的に大きな声を出せる」「歌う楽しさが分かる合唱にするよう努力する」ことと、委員がそれをリードすることが目指されている。委員がこの目標通り年間を通じてリーダーシップを発揮できるとは限らないようだが、少なくとも合唱コンクールの前には、生徒は早朝や夕刻自主的に練習に取り組んでいる。

(2) 生徒の意識

この合唱に対する生徒の意識は非常に高い。生徒の一日を観察すると、当然のことながら積極的に物事に取り組む場面と消極的にしか関わらない場面があることに気付かされる。授業の場面において、教科の得意不得意や教師と生徒の人間関係（教師の年齢、教授方法の巧拙、生徒の氏名を暗記しているかどうかまでがそれには影響する）、さらには体調等との関わりで生じるこの二つの場面を区別することはさほど難しいことではない。筆者が観察し、予想した通りに、授業への意欲の減退を知らせてくれるケースもあり、参与観察を行う中で生徒の意識を予測する目を養うことが出来るのである(7)。その目を、ホームルーム時の合唱練習に取り組む生徒に向ける時、そこには概ね「前向き」な姿勢、当然練習すべきものとして練習している姿を見てとることができる。

生徒に対するアンケート調査の結果もこのことを示している。学校生活の様々な場面についてそれがどの程度出来ているかを尋ねると、「合唱に真剣に取り組む」ことはベルマーク運動に次いで約70％の生徒が「出来ている」と回答している（表5）。これに対する教師の評価は必ずしも高くないが（表6）、生徒が真剣に合唱に取り組もうとしている姿勢は学級通信に掲載された生徒の日記などからも十分に推察される。例えば「今日は音楽の時間に、合唱コンクールに歌うクラス合唱の『君に会えて』を少しだけ練習しました。…心を込めて歌いたいと思います。難しい歌よりもちょっと簡単な歌の方がうまくいきそうな気がします。練習が楽しみです」「今日は放課後の学活の時に時間があるからということで歌を3回歌った。いつもなら2回なのに…。教室で歌うと男子の歌がすごく出てくるんです。“あ、男子がんばってるな”ってこと思うんです。じゃ私も負けられないぞ！って感じで、

この頃は歌ってます。全体的にも声が出てきて、段々よくなっているような気がします」というものである。もちろん表7に示すように、アンケートからは男子生徒を中心に「歌を歌うのが苦手」「合唱が嫌い」という生徒もいないわけではないし、「無理に歌わされるのは嫌だ」という気持ちはを抱く生徒も少なくないのだが、合唱を「音楽の得意な子だけでやればいいと思う」と考える生徒は、わずかであり、むしろ「もっと練習して上手に歌いたいと思う」生徒がほぼ80%に及んでいる（表8）。生徒にとって合唱は、学校生活の中に当然あるべきものとして自然に位置づいているのである。

それではなぜ生徒はこのような感想を抱いているのであろうか。

この理由としてまず考えられるのは、生徒自身がM中学校の合唱に自信を持っていることである。学校生活のいくつかの事柄についてそれがどの程度自慢出来るかを尋ねると、合唱についての評価は極めて高く、90%の生徒が「自慢出来る」と答えている（表9）。また80%の生徒が「合唱の上手なM中学校を誇りに思う」と答えている（表8）。この評価については学年による相違はほとんど見られない。またこの評価は地域の人々の評価とも無関係ではなく、文化祭の中で開催される合唱コンクールを多くの保護者や地域住民が参観するが「年々参観者が増えている」ことを象徴するように準備した席が足りないという現状は生徒の自信をさらに高める結果にもなっていることが予想される。

もちろんこのことと同時に大きな理由は、生徒が合唱に魅力を感じていることであろう。「合唱ってすばらしい！」と感じた経験を持つ生徒は85%以上に及び、具体的な機会としては、合唱コンクールの全校合唱やクラス合唱、西駒ヶ岳山頂での合唱などが挙げられている（表10）。確かにこれらは、それに相応しい素晴らしい合唱で、生徒も教師もともに感極まる様子も見受けられるほどである。さらに学級通信には「今日の4時間目の音楽“夢の世界を”を歌った。なんかすごかった。歌ってる途中でもまわりから声がすごく聞こえてくるから、“自分も出さなきゃ”とか“負けないぞ”なんて思いながら歌ったんだけど、歌い終った後、何かすごく気持ちがよくて“歌ったぞ”って実感が自分でもものすごく感じた。それに歌っている時は、思いっきり歌えたし、歌ってて楽しかった。」「感動　この言葉は簡単に使えるものじゃないと思ったのに、音楽の時間、本当に感動した。『夢の世界を』を歌った時最初からなんだか調子がいいなあと思った。3回目か4回目に歌った時は感動そのものだった。…みんながひとつになって、とてもきれいなハーモニーだと思った」などの日常の学校生活の中で生徒が感じた合唱の素晴らしさを示す記述を見出すことが出来る。教師が「みんなで真剣にやるとおもしろい／本気でやると楽しい／それを実感した人も多いのでは？」とコメントしている通り、アンケート調査でも「頑張って歌った時の気分は最高である」と感じる生徒が83%に及んでいる（表8）。

なお、こうして合唱を自分の学校の自慢出来ることと考える上でも、その素晴らしさを知る上でも、上級生と下級生の関係は大きな役割を果たしている。そしてそのことがまた生徒を合唱に向かわせる動機づけの一つにもなっている。「上級生の合唱は『すごい』と思う」という問いに1年生の96%が「そう思う」と答え、そのうち「とてもそう思う」と答えた生徒が80%に及んでいる。2年生でも85%以上の生徒が「そう思う」と答えている(8)。さらに学級通信を見ると次のような生徒の感想が記されている。「今日は6時間目に全校音楽がありました。今日が今年初めての全校音楽だったのでどのぐらい声が出て、どのぐらいすごい合唱なのかということがけっこう楽しみでした。…私はすごくびっくりしました。私の後ろから、1年生をかぶせてくるようなすごい歌声が聞こえました。2・3年生の声がとてもきれいで、私達の歌とは全然違う歌のように聞こえました」「何回か歌ったら、指揮者の先生が1年生は今年卒業していった3年生のかわりに十分なっているといってくれました。だからけっこうれしかったです。でも、やっぱり2、3年生にはまだまだだと思います。だからこれからは2、3年生にも負けないくらいの声で歌えるといいです」。合唱が、M中学校の「伝統」として位置付きつつあることをこれらの記述は示している。

(3) 教師の期待との関係

合唱に積極的に取り組んでいる生徒の気持ちの根底にある、合唱の上手な自分の学校を誇りに思う気持ちは、学校長やA教諭及び約6割の教師の期待や予想にそったものであった。また「頑張って歌った時の気分は最高である」「合唱って素晴らしい！」と感じる生徒の姿もやりとげた後の爽快感を味わってほしいという教師の期待にそったものであり、「上級生の合唱に尊敬や向上心を抱く」のも予想通りであった。また表8に示されるように「意外な友だちが活躍することが

ある」ことも約60%の生徒が認め、「自己のパートは責任を持って歌っている」という生徒が約80%に及んでいることと合唱の素晴らしさや気分の高揚とが無関係でないと考えるならば、生徒は教師が想像する以上に、合唱を通して責任を全うしようとする感覚を培っているようにも思われた。合唱が学校・学級経営で一定程度の役割を果たすことがここに示されている。

ただし逆に、これまでの指摘や期待が必ずしも実態通りではなかった点も明らかになった。「合唱を通じてみんな仲良くなったと思う」と感じる生徒は34%であり、「一人として無駄な人はいないという気がする」という生徒も48%であった（表８）。これらは、７割前後の教師が「全員が助け合い協力する姿勢が育つ」「共に合唱する仲間を大切にする姿勢が育つと思う」と考えていることと微妙に異なっている（表４）。この差異は生徒がこれらを回答する際には、級友のいじめや問題行動などの具体的な様子を頭に思い描き、教師は相対的には抽象的な言葉として捉えたことに起因するのではないかと思われる。もちろんこのことは教師の現実認識が全く甘いということを示しているわけではない。生徒が肯定的に捉えなかったという実態は、３分の２の教師が「いわゆる『問題行動』のある生徒の心を学校につなぎ止めることが出来る」とは考えていないことの方に示されている。

以上がM中学校の合唱についての紹介と考察である。学校に誇りを持たせることによって「荒れた」状態を立て直すという意図はほぼ達せられているし、生徒会が打ち出しているように、上級生から下級生へ「新しい伝統」として合唱が継承され始めていることも見ることが出来た。

今後の課題を挙げるとすれば、まず第一は、やはり合唱を何らかの手段として用いるのではなくそれ自体が目的となるように質の高いものに磨いていくことである。先程見たような好循環によって、M中学校の合唱は次第にそちらへ向かいつつある。何よりも教師自体の関心が高く、合唱コンクールで順位を明確にすることについて「それを動機づけに使っているのは我々の力不足」「理想的には美しいものを認め合う合唱が出来ればいい」という感想を抱く教師が多いことはその期待を増大させる。また今後の改善点として、教師が「より多くの生徒が積極的に参加するようにする」ことや「生徒の自主性に任せる」こと、「教師の指導体制をより整える」ことなどが挙げていることも問題点の的確な把握を感じさせる（表11）。

課題の第二は、現在の合唱ではまだ十分には対処し切れていない新しい学校病理に対する方途を探ることである。合唱指導をいかに改善すればそれが可能になるのか、それとも合唱による改善は現在までの「荒れた」状態からの再建というM中学校が辿った実績以上のものは期待できないのかも含めて考える必要があろう。

４．清掃の指導

（1）清掃指導の概要

M中学校では毎日15分間、生徒が清掃を行う。「学ぶ場にふさわしく整備された環境を保ち、生徒自らがその環境の重要性に気付くと共に、自ら清潔で快適な環境を作り上げようとする心を育てる」等の目標は他の多くの学校と共通しているが、M中学校では、身支度として「運動着を着用し、手ぬぐいをかぶる」こと、「清掃中は無言とする」ことが指導されている。

月曜日から金曜日の場合、５時間目の授業終了後に生徒は手ぬぐいをかぶり、各自の椅子の下に張った針金に吊している雑巾を手にして分担箇所へ向かう。授業終了７分後に準備時間を知らせる音楽が３分間流れるが、生徒はそれまでに清掃の準備を完了するよう指導されており、音楽が鳴り止むと、生徒は15分間無言で清掃に取り組む。実際に学校全体が静寂に包まれる。例えば木製の廊下の場合、ほうきで掃いた後に水拭きし、その後「拭き込み」と呼ばれる力を込めた磨き方に移る。また手洗いの掃除では、生徒は便器や床の雑巾掛けなどにも取り組む。多くの学校でそれらが必ずしも徹底されているとは言えない現状とは大きく異なっており、その結果として当然ながら非常に整った、美しい学校であるという印象を受ける。

これまで生徒による学校の清掃については賛否両論があることが紹介されている(9)。例えば、清潔にする態度・習慣の育成、公共心・協調心の育成、健康の増進、勤労の価値の学習、精神修養などの教育的効果を期待する肯定的な立場と、こうした教育的効果を否定し「学校は掃除をするところではなく勉強をするところだ」という考えや学校の掃除は不衛生であるという考え、また専門の清掃員に委託することこそ合理的だという考えに基づく否定的な立場である。

ただM中学校では、70%以上の教師が清掃の是非についてはもちろん、より厳しいと思われる「無言清掃」についても「意義があると思う」と答えており、清掃に対する意識が極めて高いことを示している。教師が比較的共通して挙げているのは「物事に真面目に

取り組む姿勢を育てること」「分担箇所の清掃を通じて生徒に責任感を育てること」（表13）で、合唱と同様に、この清掃についても意義の見出し方については教師によって異なっている。ただ、「学校を美しくすることで愛校心が育つ」ことや「学校の物品を大切にすること」が清掃と関連していることについては、積極的には関連づけないながらも弱い期待を抱いていることも推察出来る。また、生徒がこの時間を通して「進んで取り組む姿勢を育てる」ことを期待する教師も多いことが観察された。自由記述論の回答に見られる「自分で汚れを見つけ、行動し充実感を得る」「一人になって作業し、自分を見つめることが出来る」「自分自身と対話ができる」という意義づけは、それをさらに進めたもので、この無言清掃を単に「清掃」だけのためではなく、生徒が自己の判断で自己の力を行使する場として、また単なる「反省」ではない自己省察の可能な時間として活用させようという教師の意図の現れと見ることも出来よう(10)。３年生のあるクラスでは「今しかない」というクラス目標の清掃に関わるものとして「床と対話を」を掲げている。学級担任はそこに「自律、自立、自己決定、努力」といった願いを込めていると回答しており、これにも同様の意図が反映されている。

それでは、教師が生徒を無言清掃に向かわせるための指導の実態はいかなるものだろうか。動機づけの工夫としては「分担箇所の見回り」「生徒と一緒に掃除をする」「ホームルームや学級通信で無言清掃の意義を伝える」といった方法が挙げられている（表14）。教師に実際に清掃時間に何をしているかについて尋ねると、過半数の教師が見回りながらでも生徒と一緒に掃除をしていると回答しているし（表15）、ほとんどの教師が清掃時間には生徒と同様に手ぬぐいをかぶって行動している。また学級通信では、４月の年度初めての通信で「自分との対話」について「掃除の時、サボりたいと思っている情けない自分を見つめ対話する、きれいにしていくと自分もうれしくなる美しい自分と対話する」と記したり、自らの掃除の姿勢を見つ直した日記を掲載して「一人になってやる／頭を使ってやる／心を使ってやる」とコメントを寄せたりしながら指導している。また学校長が講話で、「清掃の五つの功徳」といったテーマで話すこともある。

なお、この清掃についての生徒会の取り組みは清掃委員会の分掌事項であり、先の「全校生徒一人一人が本気で取り組む清掃にする」を目標に、1995年度は「清掃開始の時間の徹底」「清掃終了の時間までの取り組みの呼びかけ」「15分間の清掃時間をより充実させるための話し合い」に活動の重点を置いて進められている。

(2) 無言清掃についての生徒の意識

無言清掃の実態について尋ねた生徒の回答は表16の通りである。44%の生徒が「だいたい守っている」ことは、清掃に集中させることさえ困難なことの多い中学生段階では教師の指導が一定程度効果を上げていると評価すべきであろう。これについて学年による差異はさほど大きくなく、「守っている生徒の割合」が2年生でやや高く、３年生でやや低い程度である。

それではなぜ生徒は無言清掃が大切だと考えているのだろうか。考えられる理由を提示すると多くの生徒が選んだのは、「無言清掃の方がよりきれいになる」「どれだけ頑張れるか試せる」「終わった時に満足感がある」という理由であった。当然ながら「守っている」と答えた生徒ほどこの種の理由を多く選んでいる（表17）。実際に守れていなくても守ろうと思っている限りは生徒は無言清掃に意義を認めており、割合は減少するが各項目について同様の傾向を示している。しかし「守ろうと思わない」と答えた生徒からは、「学校のきまりだから」「先生に注意されるから」という消極的な理由が挙げられるのみで、結局「無言清掃でなくてもよい」と思っていることが明らかとなった。この無言清掃の意義についての学年による差異は、２年生の生徒が「自分がどれだけ頑張れるか試せる」という理由を強調していることを除けば提示した理由の全てが学年が上がるにつれて選択されなくなり、逆に「無言清掃でなくてもよい」と考える生徒が増えてくる。このことは上級生ほど、無言清掃が意味のあるものとして感じなくなっていることを示している（表18）。

ただ生徒の気持ちをこの数字だけから推察するのは乱暴で、学級通信を見ると生徒が様々な感想を抱く様子を見ることが出来る。「今日なぜかそうじをしていたら体が熱くなりました。床をみがくのは初めてといってもいいくらいで…、はじめのうちは床をみがくと反射して自分の顔が見えるというふうに聞いて、そんなコトあるのかな？と思っていましたが、近くでそうじをしていた友達の顔まではいけませんでしたが、ジャージの色やもよう（線）がはっきりと写っていてびっくりしました。これでもっとみがけば絶対顔だって見えるようになると思いちょっと力を強く入れてやってみました」「この頃清掃のことについて思うこ

とがある。あまり清掃をやってくれない人がいる。分担の仕事もブツブツ文句言ってあんまりやってくれない。終了のチャイムがなると同時に出ていってしまう」「掃除の時間はどんなことを考えているのか急に不思議に思いました。今日の掃除の時、何を考えていたのか思い出そうと思っても、なぜか思い出せません。しゃべっちゃいけないと目標があるので、一人の世界に入ってしまっているのかもしれません。床、タイルをずっと見つめていると、頭の中はポーッとしています」。こうした感想に見られる“個”性は、生徒の“個性”による違いであるばかりでなく、一人の生徒のその時々による違いでもある。そして無言清掃という場は、生徒にこうした思いを抱かせる契機を提供しているのである。

さらに少なくとも生徒は、清掃を通じて、分担箇所を責任を持ってやり遂げようとする意識や身の回りをきれいにしておきたいという意識、掃除に取り組んだ時の爽快感などを身につけ味わっている（表19）。これらに関わる項目について共感する生徒は、80%前後にまで及び、さらに「掃除なんて適当にやっておけばいいと思う」生徒は17%に過ぎないことがそれを示している。

正確な比較は別の機会に譲らざるを得ないが、M中学校の生徒が、掃除は「きちんと」行うものであり、それが「特別なことではない」という意識をより強く持っていることが推察できる。さらにこのことが、学年が上がるにつれて強まる。「学校が美しい」ことを自慢できるという気持ちや、それに比べるとやや弱いが、それでも60%以上の生徒が感じている「よく掃除のできたM中学校を誇りに思う」という気持ちにつながっているとすれば、先の合唱ほどではないとしても、これも新しい「伝統」の芽生えとして評価することもできよう。

(3) 教師の期待との関係

既に触れたように教師は様々な意義をこの無言清掃の中に見出しているが、特に自分自身と向き合って進んで行動することとこの無言清掃とを関わらせている点は、教師が生徒の現状について「自主的に動く」「向上心にあふれる」面が弱いと考えていること（表20）を重ね合わせると、清掃の意義を拡大する一つの可能性を示しているとも言える。しかし結果的には、「先生に注意されるから」「学校のきまりだから」という理由を「守っている」生徒でも一定程度が挙げ、「守っていない」生徒では過半数がこの理由を挙げるに至っている（表17）。つまり、自発性を育てるのとは逆の結果になっているのみならず、「教師に従順」で「年齢に比べて幼い感じがする」生徒であるが故に「無言清掃」が行われているという教師の本来の期待とはまったく逆の結果をも示している。実際、卒業後高校に進学したM中学校の生徒は必ずしも熱心に清掃に取り組んでいるわけではないという地域の声もある。

殆どの教師が清掃への取り組みについての改善点として「清掃の意義について再確認して指導する」ことを挙げていること（表21）は、教師もそれを自覚していることを示している。無言清掃に意義があると回答しながらも、その内容も生徒への指導の方法も教師によって異なっていることに着目すると、指導に教師の個性が反映されることは当然としても、より重要なこととして教師同士が定期的に意見交換をすることが求められている。その際には、ある教師が自由記述欄に寄せていたように「（無言清掃を）やるならやる、やらないならやらない」という原点に戻った議論も必要になるし、「結局生徒の清掃の気持ちを育てるには生徒と一緒に掃除することが一番」だと思う(11)という指導方法に関わる議論も必要になると思われる、何よりもその過程で各教師が多くを学ぶことが予想され、実はそのことこそ大きな意義を持つのである。

先に挙げた合唱と同様に、この無言清掃についてもすでに学校経営の上で一定の成果を挙げており、「荒れた」時期にガラスが割られるなどの問題行動があったことを鑑みると、「掃除をすると学校を大切にしようと思うようになる」生徒が57%、学校を誇りに思う生徒が60%存在することはある程度評価できる。ただそれだけに、より多くの生徒に、その指導が及ぶようになるにはより深い検討を進めることが求められているのである。

なお、多くの教師が指摘するように、この清掃の時間は学校教育の多くの時間を占める「集団で受動的に学ぶ時間」ではなく「個人で自問しながら積極的に動く時間」となる可能性を持っていることに留意すると、検討が進むにつれてさまざまな新しい試みがなされることも期待できる。既に「責任感」や「克己」をテーマにした道徳の副読本資料と関連づけた実践(12)もなされていた。これらを並行して検討することも興味深く思われる。

5. 西駒ヶ岳登山

(1) 登山の目的と概要

M中学校では2年生が毎年7月に西駒ヶ岳（標高2956M）に一泊二日で登山を行う。

この行事は明治年間から継続して実施されているものであり、1913（大正2）年8月には突然の暴風雨のために登山隊が遭難し、引率の学校長・生徒など11名が死亡するという惨事も発生している。小説家新田次郎が詳細な取材に基づきながら『聖職の碑』(13)の中でこの事件を紹介しているが、それによれば登山施設やルートの整備の不十分さ、用具や気象予報の未発達という直接の要因に加えて、当時の信濃教育界に台頭しつつあった白樺派の理想主義教育と実践主義教育との葛藤という背景も挙げられている。確かに、今なお生命の危険すら伴う登山は、実践主義教育の流れとして位置づけることも可能で、先に紹介した「無言清掃」と同様に体を動かすことで学んでいくという要素を持っていると考えられる。ただ、それについての詳細な検討は別稿に譲り、ここでは、現在の学校行事としての登山の目的と概要を紹介し、同行して参与観察を行った経過をもとに若干の考察を加えることとする。

M中学校では、この登山の目的を「①旺盛な気迫と忍耐力により西駒ヶ岳に登り、身体を鍛え、強い意思を養う。②高山の自然（高山植物、地形、原始林、山渓、雲海など）に親しみ、観察する。③西駒ヶ岳の成因、歴史を知り、現在の様子を実際に見て、自然の偉大さを味わう。」こととし、これをもとに今年度は学年スローガン「自力・団結・感動」と定めていた。直前の学年通信では、そのそれぞれについて「自分で判断すること、そのことに責任を持つことの楽しさ。山で遭難すれば誰の責任か？それは登っている人が全面的にいけない。…自分を甘やかさず無理させず、登山や活動ができればＯＫ」「まず安全ということを考えると、パーティの中で弱い人を基準に動く。その人に対してパーティのメンバーは何ができるか？励ましの声、場合によっては荷物を持つことも」「山ならではの山独特のものを楽しみたい。景色、空、雲、空気、風。植物、動物、つかれ、暑さ、寒さ、まぶしさ…。しっかり心に刻みつけたい。足の痛み、筋肉の痛みも楽しんでこよう」と解説している。

当然のことながら安全面での配慮は十分に行き届いている。登山の全行程に2名の登山ガイドと看護婦が同行し、進退の判断や生徒の健康管理をする。天候の確認は学校との間で一定時に無線を通じてなされる。体調不良者が出た場合に備え、各休憩箇所で引き返す教師も同行している。生徒の体力面については日頃からの鍛練が指導され、1ヶ月前には「予備登山」として高原での散策が行われる。これは参加者の体力の確認、及び必要な装備、規律ある行動などの徹底を目的としたもので、生徒はこの経験をもとに、体力面のみならず、持参品の検討や、班・係活動についての確認をする。特に食料品の種類や量の選択に役立てる生徒が多かったようである。

実際の行程は以下のようなものである。学校を午前4時前に出発し、バスで登山口へ移動、5時より登山を開始。30分に1回程度の休憩をはさみながら午後1時30分頃に山荘に到着、すぐに山頂へ。山頂到着は午後3時である。再び山荘に戻り、夕食や山荘付近での散策の後、クラス毎の反省会を行い、生徒は午後8時に就寝した。翌日の起床予定は午前4時過ぎであったが御来光を望めないという判断から約1時間遅れて起床、朝食後、午前6時30分に下山を開始した。先述の遭難事件で新田次郎が小説のタイトルに用いた「遭難記念碑」にて殉難者慰霊の会を行ったり、高山植物コマクサの定植を行ったりしながら、午後3時30分頃予定より約1時間遅れで下山を終了。バスで学校へ到着したのは午後4時過ぎであった。

全行程で学年全体を二つの隊に分け、8回にわたり、休憩後クラスの出発順を変えながら登山する。これは原則的に先頭に近いところほど一定のペースで歩くことができるため、疲労が偏らないことを考慮している。ただ体調不良者などはできるだけ各クラスの先頭や登山ガイドに近い位置で登るように配慮されていた。

山頂及び殉難者慰霊の会では練習してきた「大地讃頌」が歌われる。毎年のように、居合わせた登山者からは感嘆の声が聞かれ、感極まる教師もいる。確かに、雄大な自然の中での素晴らしい合唱である。山頂付近の散策の際にも生徒は仲間同士でこの合唱を繰り返している。

また「自然に親しみ、観察する」という登山の目的の一つにそって、高山植物に関する学習も行われる。学習記録係は、全体の先頭クラスの生徒がガイドの指示に従って高山植物の名前を記したプラカードをつけ、全生徒がそれを目にした後に、最後尾のクラスの生徒がそれを取るように定めている。時折間違った植物名のプラカードがつけられることもあるが、生徒にはこれを通じて高山植物の名を学習することが期待されている。コマクサの定植も、同様の趣旨から失われつつある高山の自然保護を体験させることを期待して行われる。ただ、登山中や休憩中に登山路を外れて高

山植物を踏んでしまう生徒もおり、「せっかくコマクサを植えたとしてもそれでは何にもならない」と教師が注意する場面もあった。

(2) 生徒の実態

先に紹介した遭難を扱った小説や映画を見ることを通して、生徒は登山の危険性について認識している。そのことは生徒にとってこの登山には皆で大きな課題に向かう場という意味があることを示している。その結果、臨海学校でのボート訓練や林間学校でのオリエンテーリングなどとは全く違った緊張感を持って登山に臨むことになる。

さらにこの登山は地域の「子育て」の中でも一つのプロセスとしての意味を有しているようである。教師が疾病を持った生徒を登山させるかどうかを決定する家族会議に呼ばれ、生徒の父親が「西駒に登らなければ、この地域の子どもではない」と発言したのを聞いていることや、午前4時前の学校出発時にも帰校時にも多くの保護者が学校に集まり、「出発の会」「解散の会」では学年ＰＴＡ会長の挨拶があること、地域の有線放送でも下山時刻の遅れなどが放送されることなどは、登山の背景にある、地域の人々の意識を示している。

ただ、この登山をどの程度自慢できるかを生徒に尋ねると、実際に登山を経験し印象も薄れていないと思われる2年生の56%、3年生の53%が「自慢できる」と答えたに止まり、1年生に至っては46%のみがそう答えただけである（表9）。

こうした印象は、やはりこの登山が「苦しさ」や「辛さ」を伴うことが挙に起因するように思われる。同行したクラスの女子生徒の一人が山頂で「もう登山は嫌だ。疲れる」と話していたことも、登山直後の学級通信で学級担任が、全生徒が2日後に提出する登山記に触れて、「すべてに共通していたのは運動部系の部活で活躍している人も含めて　みんな苦しい思いをした　みんなつらい思いをしたということです」と記していることもそれを示している。よく言われる、登山をやりとげた達成感を上回るものだったのかもしれない。

しかし、この登山について「誇りに思うと感じた」生徒が予想していたほど多くなかったこととは別に、この数字では捉え切れなかった参与観察の中で印象的だった点に以下、触れておきたい。

その第一は、生徒同士の連帯感である。登山の行程の様々な場面で、友人を気遣う姿勢を見ることができた。登山開始当初は聞こえていた賑やかな話し声が疲労感から次第に聞こえなくなった中でも、友人がつまづいたり、苦しそうな表情を見せる度に「だいじょう（ぶ）？」と誰かが声をかけ、それに対して「だいじょう（ぶ）、だいじょう（ぶ）」と声が返るという場面が多く見られた。さらに、学年通信で指導された通りに体力のない生徒の荷物を友人が自らのザックに入れて運ぼうとする光景も随所に見られた。教師が友人に委託可能なものと、そうでないものを分けるように指示し、生徒がそれに従っている様子からは、そのことも登山時には当然そうすべきこととして自然に行動しているように見えた。これらは言葉で表現すれば先の目標の「団結」に当たることになるが、既に見たように課題が大きいだけに生徒同士の結びつきがより強くなるような印象を受けた。

第二に印象的だったのは、生徒の係活動の的確さであった。行動班の単位で全員が、それぞれ統率、宿舎・整備、学習・記録、食事・保健のいずれかの係に就き、クラス係長、学年係長が設けられている。例えば食事・保健の係は、前日までの活動として「クラスで体力のない人、病気の人を前もって知っておく」ことも担当する。また全行程において小休止の度に班員の健康状態のチェックを行う。山荘での食事を迎える頃には殆どの生徒が疲労を覚えているが、食事係は配膳を行ったり、水筒に飲料水を入れる手配を整える。こうした係活動に全員が就くことは、先の連帯感と同様に集団の中で自己の役割を全うする責任感を身につける上で、有効であるようにも思われた。

加えてある教師は、ここでも清掃と同様に「自己との対話」があったことを述べている。そして学級通信に「早く休みにならないの　つかれたもう休みたい　まだあんなに登らないといけないの　どうしてそんなにしてまで山に登るの　何回も何十回も自分と対話し、自分をみつめて…けれど、誰も自分で足を止めようとしなかった。みんな自分自身を励まし、自分の弱さに勝ち、自分のプライドにかけて登り続けた。…自分自身に聞こえてきたのは何だっただろうか」と記している。確かに生徒が自分を励ましながら登る様子も随所に見ることができた。下山後、教師からも学級担任の予想を遥かに超えて粘り強く山頂を目指した生徒の姿も報告された。また、そこには、教師とは異なる励まし方をする登山ガイドや同行看護婦の力が働いていたことに気付いた教師もいた。

これらに加えて、山頂での合唱が生徒の心に深く印象づけられていることを最後に示しておきたい。居合

わせた登山者の感動を呼び起こすのみでなく生徒自身もそれに心を動かされていたようである。夕食後の散策の際に、誰からともなく輪になって歌い始めることにも、アンケートで「合唱の素晴らしさを感じた機会」として、2年生の46%、3年生の54%が「西駒での大地讃頌」を挙げていることにもそれは示されている（表10）。そして音楽の教師がM中学校の合唱を紹介する時にも当然この山頂での合唱が大きな意味を持つものとして扱われている。

6．M中学校の教育活動全般について ～まとめと今後の課題～

M中学校の生徒に「現在学校へ通うのが楽しい」かどうかを尋ねた結果が表22である。「楽しい」と答えた生徒が50%、「ふつう」と答えた生徒が33%で、殆どの生徒がM中学校に通うことを楽しいと感じており、この点では現在のM中学校の学校経営は概ね良好と判断してよいと思われる(14)。

この生徒の意識は地域の人々にも共有されており、「荒れた」当時の学校に比べて「落ち着いた」M中学校は高い評価を受けているようである。その鍵が、本稿で紹介した学校に愛着心や誇りを持たせるような指導のあり方であった。教師集団がなぜこのように一つの目標に結束できたのかについて、学校長やA教諭は、個々の教師が「自分はいかなる形でM中学校を良い学校にするために関わるか」を考えたからであると説明した。ただ、より着目すべき点は「合唱」も「無言清掃」も（さらには「西駒ヶ岳登山」も含めることができるかもしれないが）、いずれもまず「形」「行動」から学校の教育目標をまとめたことであるように思われる。既に見たように、同じ「合唱」「無言清掃」でも教師の願いは全く同じとは言えなかった。しかし、「形」「行動」面の変化が効果的に働き、M中学校の学校改善の試みは成果を上げたと言える。そして生徒の中にも地域の中にも「M中らしさ」「M中の伝統」として認知されつつある。

しかし今後の課題を検討すると、今度はそれぞれに微妙にずれていた「合唱」や「無言清掃」に対する意義付けを教師同士が検討し合うことが求められるはずである。

その理由の第一は、特に「無言清掃」について、生徒が「きまりとして」「しかられるから」という消極的理由を選択する傾向が見られるからであり、アンケートで回答された「自己を見詰める」という意義づけなどには豊かな内容が期待されるにもかかわらず消極的な動機づけでは望ましい成果を得られないと思われるからである。

第二の理由は、生徒の自主性をより育てることが求められているからである。M中学校では集会への移動は、教室前で整列し、廊下や階段の各所で教員や生徒の委員がその移動を監督するように決められている。文化祭のクラス見学等も生徒が自らの好みに従って見学するのではなく定められた制限時間の中で定められたスペースを慌ただしく見学することになっていた。これらについて、地域にも「何となく管理し過ぎという印象を受ける」という声もあるし、「集会は現地集合にしたい」と考える教師もいる。

「形」「行動」から入って「形」から抜けるということが可能かどうかは(15)、これまでの効果的だった実践を教師相互の間でさらに検討することができるかどうかにかかっているようにも思われる(16)。

またこのことは、先の学校に通う楽しさについて「楽しくない」と回答した13%の生徒の多くが、（現在までの分析では十分な手がかりを得ることはできていないが）それ以外の生徒に比べ「合唱って素晴らしい」と感じたことがないと回答している点や、「いじめがない」ことを全然自慢できないと回答しているという特徴を持ち、さらに「いじめに関わることがら」について、「いじめられたことがある」「答えたくない」という回答を多く寄せていることに目を遣ると一層大きな意味を持つと思われる。周知のように全国的に見て現在の学校の抱える問題の質が、「荒れた」当時の課題とやや変化している。「荒れた」状態を改善するのと同じ方法で新しい課題にも向かうことができるのかは再検討する必要があり、当然教師同士の議論はその手助けになるはずである。

幸いなことにM中学校で極めて積極的な教科研究が行われていることは、その「場」が十分に提供され得ることを示している。「道徳」の研究授業を参観したが、指導主事の助言のもとに作成された指導案に基づいて授業が行われ、午前中の研究授業後給食時までに参観者がコメントを提出、教科の担当者がそれを印刷し、放課後はそれをもとに教頭の司会で全教員参加の研究会が開かれるという興味深い内容であった。授業の性格もあって、教材資料の分析や授業方法のみならず、授業者の生徒への期待や人間観等にも議論が及び、それに対して出席者から意見が出され戦わされる場面も見られた。こうした活発な研究会の「伝統」は、9割以上の教師が同僚の助言を、8割の教師が管

理職の助言を「役に立つ」と考えていることに示されており、これはとりもなおさず様々な新しい課題の解決策を模索するための「場」が準備されていることを示している（表23）。

さらに教師による評価は必ずしも高くないが、地域の教育会が主催する学習会も興味深かった。西田幾多郎の哲学がテキストであり、夏季講習会では京都から講師(17)が招聘されてゼミ形式の学習会が持たれた。直接、学校現場のノウハウとは結びつかないことがかえって「教育」という営みそのものについてまで深い議論をすることにつながっていたように思われた。残念ながら西田のテキストを教育現場の現象にどう当てはめるかという傾向が強く、西田の人間理解そのものと教育現場で教師が実感していることとを重ねて考えるというところにまでは進んでいないように思われたが、合唱や清掃などの意義付けについて考えるためにこうした学習機会が準備され、そこから示唆を得ることも出来るということは、貴重なことであると思われる。

以上が、M中学校の「豊かな心を育てる」学校経営の実践と課題である。

本稿を通じて学校病理に対するいくつかの示唆が提示できたように思う。とりわけ「形」から入る傾向の見られた学校経営のあり方は、昨今の哲学的な議論とも併せて論じることによりいくつかの重要な論点を含んでいるように思われた。

もちろん学校を本当に総体として捉えて、本当の改善策となるような研究成果を提示するためには、担任教師の願いとクラスの生徒の現状などより小さな集団に着目すること、M中学校の地域の特性と都市圏での応用の可能性、教師の成育史の問題などより詳細に検討すべき点があるが、本稿では、切り離すのでなく全体像を描くことに努めたため、その点は不十分である。M中学校での参与観察を継続することによってこれらの研究上の課題を解決して行きたいと考えている。

【註】

（1）ここでは教育経営学会における先行研究、例えば木岡一明・榊原禎宏「教師の授業認識に基づく授業経営の個業性と協業性」、小山悦司・河野昌晴「教師の自己教育力に関する研究」（共に「日本教育経営学会紀要第32号」1990）、小野由美子「職場としての学校：学校の組織特性が教師の教育活動に及ぼす影響」、曽余田浩史「学校組織文化のマネジメントに関する一考察」（共に「日本教育経営学会紀要第36号」1994）などを念頭に置いているが、教師の願いと教育実践の内容に踏み込んで、学校の変容を十分に捉えた研究は少ない。そのためには当然教育方法の検討なども必要になるが本研究はその第一歩と考えている。

（2）清水一彦他『教育データランド'95 - '96』時事通信社　1995　pp.68-77

（3）第46回関東甲信越地区中学校長会研究協議会（1994）での学校長の発表資料による

（4）大村英昭は問題生徒が、警察ー学校ー家庭という三角形の真ん中に置かれ三者が互いに譲渡する負の相関になることを指摘する。教諭の行動はこれを防ぐ役割を果している。（大村英昭『新版非行の社会学』世界思想社　1989）

（5）M中学校の音楽教師の地域での研究会の発表レジメによる

（6）『教育音楽　中学・高校版』1995年10月号、1995年12月号及び『教育音楽別冊 クラス合唱を育てる』（音楽之友社）等を参照。調査票作成の上でも参考にした。

（7）佐藤郁哉『フィールドワーク』新曜社 1992 pp.129-151を参照。

（8）３年生に無回答が多いのは「上級生」がいないためである。「上級生」について回答したそれ以外の回答者は、１、２年生の時のことを想起して回答したと思われる。

（9）沖原豊『学校掃除』学事出版 1978 など。調査票作成の上でも参考にした。

(10) このことは「『わざ』の世界」での目標が学習者自体に期待され「学習者自体が生成的に豊かにしていく目標である」という指摘（生田久美子『「わざ」から知る』東京大学出版会 1987 p.18）や「身体」に定位した知としてモラルの知を問い直そうとする徳倫理学の試み（例えば、越智貢「モラル・モニズムが忘れたもの」日本倫理学会編『徳倫理学の現代的意義』慶應通信 1994 p.12）との関わりで詳細に検討したい。

(11) 前掲『学校掃除』では中学生の62%、中学生保護者の52%、中学校教師の75%が「教師も一緒に掃除をするべきである」と考えていることが紹介されている（pp.166-168）。

(12) 社団法人信濃教育会出版部『わたしの築くみちしるべ２』所収の「残されていた稲のうね」が用いられた。

(13) 新田次郎『聖職の碑』講談社 1976

(14) 昨年度東京大学教育行政学研究室が行った「学校の評価、選択、経営に関する研究」での調査（「東京大学教育学部教育行政学研究室紀要第14号」所収）やベネッセ教育研究所による調査（「モノグラフ中学生の世界 Vol.5-1」所収）などでも同様の結果が出ている。

(15) 生田久美子　前掲 pp.23-43

(16) 浦野東洋一は「あいまいな組織体」である学校を効果的に機能させるために、教師の相互支援的な人間関係の構築、話し合いによって、合意の範囲を広め、レベルを高めていくことの必要性に触れている。（浦野東洋一「学校の経営管理とは何か」『講座学校７組織としての学校』柏書房 1996 pp.22-23）

(17) 『西田哲学の世界』（筑摩書房 1995）など西田哲学の著名な研究者である大橋良介氏が講師であった。

【表１】サンプルデザイン（有効回答）

<生　徒>

学　生	1 年	2 年	3 年	計
男　子	76	130	162	368
女　子	71	124	156	351
不　明	1	0	0	1
計	148	254	318	720

<教　師>

教職年数	1～9	10～19	20～29	30～	計
男　性	13	8	5	2	18
女　性	2	3	1	0	6
計	15	11	6	2	34

【表２】教師：合唱・清掃の指導にどの程度力を入れているか

	合 唱	清 掃
かなり力を入れている	7	8
ある程度力をいれている	14	23
あまり力を入れていない	7	2
殆ど力を入れていない	5	1
ＮＡ	1	0
全　体	33	34

数値は実数

【表３】教師：合唱の指導にどう関わっているか（複数回答）

	実 数	%
自分のクラスの学活で練習を聞く	22	71.0
積極的に音楽の先生と連絡を取る	10	32.3
学級通信等の話題に取り上げる	14	45.2
クラスの生徒に自分で専門的指導	5	16.1
自分のクラスの音楽の時間を参観	2	6.5
自分が優れた合唱を聴く	3	9.7
他のクラスの練習を聴く	5	16.1
生徒に任せて特に何もしていない	4	12.9
その他	2	6.5
ＮＡ	3	
全 体	31	100.0

【表4】教師：合唱への取り組みについての様々な考え方への共感（各項目についてどの程度同意するかを4段階で回答）

項　目	とてもそう思う	まぁもそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	NA	全　体
①合唱を通して学校を誇りに思う気持ちが育つ	10 (31.3)	13 (40.6)	8 (25.0)	1 (3.1)	2	32 (100.0)
②自己のパートを全うするという責任感が育つ	1 (3.0)	17 (51.5)	13 (39.4)	2 (6.1)	1	33 (100.0)
③全員が助け合い協力する姿勢が育つ	7 (21.2)	16 (48.5)	8 (24.2)	2 (6.1)	1	33 (100.0)
④共に合唱する仲間を大切にする姿勢が育つ	5 (15.2)	20 (60.6)	7 (21.2)	1 (3.0)	1	33 (100.0)
⑤他の場では活躍できない生徒が活躍できる	6 (18.2)	17 (51.5)	10 (30.3)	0	1	33 (100.0)
⑥一つのことに集中して取り組む姿勢が育つ	5 (15.2)	23 (69.7)	4 (12.1)	1 (3.0)	1	33 (100.0)
⑦やり遂げた後の爽快感を味わってほしい	21 (63.6)	9 (27.3)	2 (6.1)	1 (3.0)	1	33 (100.0)
⑧いわゆる「問題行動」のある生徒の心を学校につなぎ止めることができる	2 (6.1)	8 (24.2)	15 (45.5)	8 (24.2)	1	33 (100.0)
⑨他の学習にはない解放感・ゆとりが味わえる	3 (9.1)	13 (39.4)	15 (45.5)	2 (6.1)	1	33 (100.0)
⑩上級生の合唱に触れて尊敬や向上心を抱く	13 (39.4)	14 (42.4)	6 (18.2)	0	1	33 (100.0)

（　）内は%を示す

【表5】生徒：学校生活の様々な場面での達成度（各項目についてどの程度できているかを4段階で回答）

項　目	とてもよくできている	だいたいできている	余りできていない	全然できていない	全 体	NA =
①チャイムまでに着席する	5.3	33.6	50.1	11.0	100.0	3
②集会にきちんと集合する	26.3	53.2	19.1	1.4	100.0	2
③学習態度が整っている	3.1	34.8	52.7	9.5	100.0	4
④挨拶がよくできる	13.8	46.7	33.5	6.0	100.0	3
⑤学級の係活動に真剣に取り組む	11.8	53.4	30.2	4.6	100.0	1
⑥ベルマーク運動等に真剣に取り組む	27.9	50.3	18.8	3.1	100.0	2
⑦清掃に真剣に取り組む	5.3	47.4	41.1	6.1	100.0	3
⑧合唱に真剣に取り組む	23.4	46.4	25.0	5.2	100.0	3
⑨みんなが互いに助け合う	12.8	48.7	32.4	6.1	100.0	3
⑩きまりをよく守る	4.0	30.4	53.8	11.8	100.0	2
⑪しっかりけじめがつけられる	2.7	32.8	53.2	11.3	100.0	4
⑫先生に言われずに自主的に行動	4.0	28.3	55.4	12.3	100.0	3

数値は%を示す

【表6】教師：クラスの生徒の現状への感想（各項目についてどの程度満足しているかを4段階で回答）

項　目	とても満足している	まぁ満足している	余り満足していない	全然満足していない	NA	全　体
①チャイム着席の状態	0	13 (50.0)	11 (42.3)	2 (7.7)	8	26 (100.0)
②集会の集合のしかた	1 (4.0)	18 (72.0)	5 (20.0)	1 (4.0)	9	25 (100.0)
③学習態度	0	7 (26.9)	15 (57.7)	4 (15.4)	8	26 (100.0)
④挨拶	1 (3.8)	4 (15.4)	16 (61.5)	5 (19.2)	8	26 (100.0)
⑤学級の係活動への取り組み	2 (7.7)	6 (23.1)	16 (61.5)	2 (7.7)	8	26 (100.0)
⑥ベルマーク運動等への取り組み	2 (7.7)	13 (50.0)	10 (38.5)	1 (3.8)	8	26 (100.0)
⑦清掃への取り組み	4 (15.4)	11 (42.3)	11 (42.3)	0	8	26 (100.0)
⑧合唱への取り組み	4 (15.4)	11 (42.3)	9 (34.6)	2 (7.7)	8	26 (100.0)
⑨学級としてのまとまり	0	1 (4.0)	17 (68.0)	7 (28.0)	9	25 (100.0)

（　）内は%を示す

【表７】生徒：合唱は好きか／歌を歌うのは得意か

	合唱は好きか						歌を歌うのは得意か					
	好き	どちらかといえば好き	どちらかといえば嫌い	嫌い	全体	NA	得意	どちらかといえば得意	どちらかといえば苦手	苦手	全体	NA
男子	14.0	35.1	36.4	14.5	100.0	3	8.5	30.6	45.4	15.6	100.0	2
女子	40.9	42.0	14.3	2.9	100.0	1	13.0	48.1	34.6	4.3	100.0	4
全生徒	27.1	38.4	25.6	8.9	100.0	4	10.6	39.1	40.1	10.2	100.0	6

性別不明＝１は全生徒にのみ算入・数値は％を示す

【表８】生徒：合唱についての感想（各項目についてどの程度同意するかを４段階で回答）

項目	とても そう思う	まぁ そう思う	あまりそう 思わない	全然そう 思わない	全体	NA =
①自分のパートは責任を持って歌っている	24.6	55.1	18.5	1.8	100.0	0
②合唱によってみんな仲良くなったと思う	7.3	26.8	53.8	12.2	100.0	4
③誰一人として無駄な人はいない気がする	13.2	34.5	40.3	12.0	100.0	2
④意外な友達が活躍することがある	19.9	39.0	33.2	7.9	100.0	7
⑤頑張って歌った時の気分は最高である	50.6	32.8	12.7	3.9	100.0	4
⑥上級生の合唱はすごいと思う	56.6	29.8	9.8	3.8	100.0	13
⑦もっと練習して上手に歌いたいと思う	39.2	39.5	17.2	4.0	100.0	1
⑧合唱の上手なM中学校を誇りに思う	38.9	40.9	15.3	4.9	100.0	3
⑨音楽の得意な子だけでやればよいと思う	5.7	10.2	42.1	42.0	100.0	3
⑩無理に歌わされるのはいやだ	28.9	33.0	24.9	13.2	100.0	1
⑪合唱をするのは面倒な気がする	9.5	22.5	47.8	20.1	100.0	5
⑫コンクールでは順位をつけないでほしい	15.6	19.1	34.6	30.7	100.0	1

数値は％を示す

【表９】生徒：学校生活の様々な場面をどれくらい自慢できるか（各項目についてどの程度自慢できるかを４段階で回答）

項目	とても自慢できる	まぁ 自慢できる	あまり自慢できない	全然自慢できない	全体	NA =
①いい先生が多い	5.9	47.5	34.8	11.8	100.0	7
②部活動が強い	5.7	46.6	40.6	7.0	100.0	6
③勉強がよくできる	2.2	22.0	64.2	11.5	100.0	7
④いい友達が多い	22.7	56.4	18.5	2.5	100.0	5
⑤学校が美しい	28.3	49.7	19.7	2.4	100.0	5
⑥合唱が上手	52.5	38.1	7.5	1.9	100.0	0
⑦西駒登山がある	17.4	35.2	34.1	13.2	100.0	2
⑧文化祭が盛り上がる	41.5	39.3	13.5	5.8	100.0	6
⑨「いじめ」がない	4.8	27.8	49.8	17.6	100.0	11
⑩周りに豊かな自然がある	44.6	39.7	13.7	2.0	100.0	3
⑪地域の人が親切	19.5	53.1	23.8	3.6	100.0	1

数値は％を示す

【表10】生徒：「合唱ってすばらしい」と感じたことがあるか×学年

	1 年	2 年	3 年	全 校
ある	88.3	86.6	83.3	85.5
ない	11.7	13.4	16.7	14.5
NA	3	1	1	

⇒

／それはどんなときか（複数回答）

合唱コンクールの全校合唱	64.9
合唱コンクールのクラス合唱	52.0
西駒での大地讃頌	47.6
入学式	20.4
卒業式	13.9
3年生を送る会	11.4
その他	10.3

数値は%を示す

【表11】教師：合唱への取り組みについて改善すべき点（複数回答）

項　目	実 数	%
特に改善すべき点はない	2	6.1
より厳密な審査ができるように	2	6.1
教師の指導連携体制をより整える	7	21.2
より多くの生徒が積極的に参加するように	15	45.5
もう少し生徒の自主性に任せる	7	21.2
コンクールの順位をなくす	4	12.1
N A	1	
全　体	33	100.0

【表12】教師：「無言清掃」についての考え

項　目	実 数	%
無言清掃には意義があると思う	24	72.7
賛成でも反対でもなく学校の方針に合わせて	7	21.2
本当は反対だが学校の方針に合わせて	2	6.1
反対なのでやめた方がいいと考えている	0	
N A	1	
全　体	33	100.0

【表13】教師：清掃への取り組みについての様々な考え方への共感（各項目についてどの程度同意するかを4段階で回答）

項　目	とてもそう思う	まぁもそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	NA	全　体
①学校を美しくすることで愛校心が育つ	3 (9.1)	24 (72.7)	6 (18.2)	0	1	33 (100.0)
②生徒に学校の物品を大切にする姿勢が育つ	5 (15.2)	23 (69.7)	5 (15.2)	0	1	33 (100.0)
③分担箇所の清掃を通じて生徒に責任感が育つ	10 (30.3)	20 (60.6)	2 (6.1)	1 (3.0)	1	33 (100.0)
④清掃を通じて生徒に協力する姿勢が育つ	3 (9.1)	22 (66.7)	8 (24.2)	0	1	33 (100.0)
⑤生徒は汚れを何とか落とそうとして努力する	4 (12.1)	19 (55.6)	10 (30.3)	0	1	33 (100.0)
⑥清掃は身の回りを清潔にする習慣を育てる	9 (27.3)	12 (36.4)	12 (36.4)	0	1	33 (100.0)
⑦物事に真面目に取り組む姿勢を育てる上で無言清掃は効果的だと思う	12 (36.4)	18 (54.5)	2 (6.1)	1 (3.0)	1	33 (100.0)
⑧やり遂げた後の爽快感をより強く味わわせる上で無言清掃は効果的だと思う	8 (24.2)	14 (42.4)	11 (33.3)	0	1	33 (100.0)
⑨汚れを見つけて掃除するなど、生徒に進んで取り組む姿勢が育つと思う	5 (15.2)	21 (63.6)	7 (21.2)	0	1	33 (100.0)
⑩雑談など妥協した自分を反省する機会になる	5 (15.2)	12 (36.4)	13 (39.4)	3 (9.1)	1	33 (100.0)

（　）内は%を示す

【表14】教師：無言清掃への動機づけ
（複数回答）

項　目	実数	%
学活や学級通信で意義を伝える	12	37.5
分担箇所を見回る	16	50.0
生徒と一緒に清掃をしている	14	43.8
生徒の班・係活動に任せる	1	3.1
「きまり」として守るよう伝える	3	9.4
特にとり立てて指導はしていない	1	3.1
その他	3	9.4
N A	2	
全　体	32	100.0

【表15】教師：清掃の時間に多くの場合何をしているか
（複数回答）

	実数	%
担当クラスの分担箇所を見回る	24	70.6
生徒と一緒に掃除をする	18	54.5
生徒に任せて教材研究等をする	0	
その他	3	8.8
全　体	34	100.0

【表16】生徒：無言清掃の実態×学年

	1　年	2　年	3　年	全　校
きちんと守っている	4.7	6.7	3.5	4.9
だいたい守っている	40.5	47.0	34.1	40.0
守ろうと思うが守っていない時が多い	29.1	30.4	30.9	30.3
守ろうと思うがほとんど守れていない	21.6	10.7	20.1	17.1
守ろうと思わないのであまり守らない	2.7	2.8	4.8	3.6
守ろうと思わないのでほとんど守らない	1.4	2.4	6.7	4.1

数値は％を示す　　NA＝ 1　　4　　5

【表17】生徒：無言清掃の理由（複数回答）×無言清掃の実態

	きちんと守っている	だいたい守っている	守ろうと思うが、守っていない時が多い	守ろうと思うが、ほとんど守れていない	守ろうと思わないのであまり守らない	守ろうと思わないのでほとんど守らない
無言の方がよりきれいに出来るから	52.9	44.0	37.9	39.3	16.0	3.6
終わった時に満足感があるから	47.1	29.6	31.3	22.1	4.0	0.0
無言の方がより早く出来るから	20.6	27.8	36.4	30.3	12.0	10.7
自分がどれだけ頑張れるか試せるから	47.1	51.1	44.4	41.8	8.0	10.7
先生に注意されるから	17.6	8.8	12.6	19.7	16.0	39.3
学校のきまりだから	17.6	18.3	27.1	26.2	28.0	50.0
無言清掃でなくてもよいと思う	14.7	19.4	17.8	26.2	76.0	53.6
その他	2.9	6.3	7.0	7.4	12.0	7.1
全　体	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

数値は％を示す　NA＝1　　2　　3　　0　　1　　1

【表18】生徒：無言清掃の理由（複数回答）×学年

	1　年	2　年	3　年	全　校
無言の方がよりきれいに出来るから	61.5	35.6	31.5	39.2
終わった時に満足感があるから	33.1	29.2	23.8	27.7
無言の方がより早く出来るから	50.7	27.3	20.6	29.2
自分がどれだけ頑張れるか試せるから	41.9	56.9	34.4	44.0
先生に注意されるから	10.8	16.6	13.2	13.9
学校のきまりだから	27.0	24.1	22.5	24.0
無言清掃でなくてもよいと思う	9.5	18.2	33.8	23.2
その他	7.4	5.9	7.4	6.9
全　体	100.0	100.0	100.0	100.0

数値は％を示す　NA＝　1　7　8

【表19】生徒：清掃についての感想（各項目についてどの程度同意するかを4段階で回答）

項　目	とてもそう思う	まぁもそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	全　体	NA＝
①分担箇所は責任を持って掃除したい	26.9	59.3	11.5	2.2	100.0	0
②掃除をすると学校を大切にしようと思う	12.4	45.5	36.5	5.6	100.0	2
③掃除の時にはみんなが協力できる	11.4	35.4	42.5	10.7	100.0	2
④何とか汚れを落そうとして必死になることがある	22.9	51.8	21.5	3.8	100.0	0
⑤身の回りはいつもきれいにしておきたい	36.6	50.1	11.7	1.7	100.0	1
⑥頑張って掃除をした時には爽やかな気持ちになる	34.9	38.1	21.6	5.4	100.0	1
⑦一生懸命するうちに掃除が楽しくなることがある	20.2	35.0	34.1	10.7	100.0	2
⑧おしゃべりをする弱い自分を反省することがある	17.6	47.3	26.3	8.8	100.0	4
⑨掃除なんて適当にやっておばいいと思う	3.8	13.8	59.2	23.2	100.0	5
⑩手ぬぐいをかぶるのが面倒だと思う。	16.2	25.7	33.6	24.5	100.0	5
⑪友達が掃除をしないので腹が立つことがある	21.7	38.7	28.3	11.3	100.0	5
⑫よく掃除のできたM中学校を誇りに思う	22.0	45.2	24.3	8.5	100.0	3

数値は％を示す

【表20】教師：クラスの生徒の現状への感想（各項目についてどの程度共感するかを4段階で回答）

項　目	とてもそう思う	まぁもそう思う	余りそう思わない	全然そう思わない	NA	全　体
①生徒が学校生活を楽しんでいる	3（11.1）	20（74.1）	3（11.1）	1（3.7）	7	27（100.0）
②生徒が互いに助け合っている	1（3.7）	16（59.3）	10（37.0）	0	7	27（100.0）
③しっかりけじめがつけられる	0	5（18.5）	19（70.4）	3（11.1）	7	27（100.0）
④教師とよく話をする	2（7.4）	19（70.4）	6（22.2）	0	7	27（100.0）
⑤教師に従順である	3（11.1）	12（44.4）	12（44.4）	0	7	27（100.0）
⑥教師の指示なしに自主的に動く	1（3.7）	8（29.6）	16（59.3）	2（7.4）	7	27（100.0）
⑦向上心にあふれている	2（7.4）	7（25.9）	17（63.0）	1（3.7）	7	27（100.0）
⑧きまりをよく守ることが出来る	10（37.0）	11（40.7）	6（22.2）	0	7	27（100.0）
⑨年齢に比べて幼い感じがする	3（11.1）	10（37.0）	12（44.4）	2（7.4）	7	27（100.0）

（　）内は％を示す

【表21】教師：清掃の取り組みについて改善すべき点
（複数回答）

	実数	%
特に改善すべき点はない	1	2.9
「無言」についてより徹底して指導する	4	11.8
教師の指導体制をより整える	8	23.5
清掃の意義について再確認して指導する	28	82.4
もう少し生徒の自主性に任せる	7	20.6
「無言」という条件をなくす	1	2.9
全　体	34	100.0

【表22】生徒：学校生活の印象（学校へ通うのが楽しいか）　×学年

	1　年	2　年	3　年	全　校
とても楽しい	13.0	11.9	19.7	15.5
かなり楽しい	8.9	20.6	13.3	15.0
やや楽しい	26.7	19.0	19.4	20.7
ふつうくらい	32.9	35.2	31.7	33.2
やや楽しくない	8.2	7.1	5.1	6.4
余り楽しくない	8.2	5.1	6.7	6.4
全然楽しくない	2.1	1.2	4.1	2.7
全　体	100.0	100.0	100.0	100.0
数値は％を示す	NA＝2	1	3	6

【表23】教師：自身の力量形成に役立つ（各項目についてどの程度役立つかを４段階で回答）

項　目	とても役立つ	まぁ役立つ	余り役立たない	全然役立たない	未経験	NA	全　体
①生徒の不満・評価	12（36.4）	18（54.5）	3（9.1）	0	0	1	33（100.0）
②保護者の不満・評価	3（9.1）	16（48.5）	12（36.4）	0	2（6.1）	1	33（100.0）
③同僚の助言	14（42.4）	17（51.5）	2（6.1）	0	0	1	33（100.0）
④校長・教頭の助言	7（21.9）	19（59.4）	3（9.4）	1（3.1）	2（6.3）	2	33（100.0）
⑤指導主事の助言	3（9.1）	18（54.5）	10（30.3）	0	2（6.1）	1	33（100.0）
⑥地域の教育会での学習	0	12（36.4）	11（33.3）	7（21.2）	3（9.1）	1	33（100.0）
⑦組合の集会・研究会等	0	9（27.3）	13（39.4）	8（24.2）	3（9.1）	1	33（100.0）
⑧研究授業を見せること	12（36.4）	16（48.5）	3（9.1）	1（3.0）	1（3.0）	1	33（100.0）
⑨研究授業を見ること	6（18.2）	21（63.6）	4（12.1）	2（6.1）	0	1	33（100.0）
⑩教育関係の雑誌を見る	1（3.0）	19（57.6）	10（30.3）	3（9.1）	0	1	33（100.0）

（　）内は％を示す